

# 高等学校における特別支援教育の取り組みと工夫

北海道上士幌高等学校 教諭 高橋 江 恵

## 1 はじめに

本校には、LDやADHD等の発達障害の可能性のある生徒など、特別な教育的支援を必要とする生徒が、毎年10名程度在籍しており、その入学者数は増加傾向にある。そこで特別な教育的支援を必要とする生徒に対する卒業後を見越した社会性向上のためのトレーニングや発達段階を考慮した指導内容や指導方法等について、専門的な知見からの具体的な支援方法を学校全体として検討する必要がある。

そこで、平成26年度より文部科学省委託の「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」の研究に3年間取り組んできた。本研究では、一斉授業における指導内容や指導方法等の工夫・改善を図り、「自立活動」の領域を設定することとなった。自立活動ではソーシャルスキルトレーニング等の授業を行うなど、個々の能力・才能を伸ばす指導の充実に向けた取り組みを計画した。また、定期的に大学教員等による専門的な助言を受け、校外研修に積極的に参加し、特別支援教育に関する教員の専門性の向上とともに校内指導体制の構築を図ることを目指した。

## 2 多様な教育的ニーズを必要としている生徒への対応について

### (1) 実態把握の方法

- ①中学校訪問実施…3月末に新入生全員の出身中学校を訪問し、生徒一人ひとりについての引継ぎを行い、年度初めの職員会議で情報を共有する。
- ②生徒の実態把握調査実施…3月の高校入試の合格通知書発送時に校内支援委員会から「生徒の実態把握調査」用紙を配布し、入学式前の事前登校日に回収する。事前登校日と入学式に個別面談希望生徒及び保護者と面談を実施する。
- ③個別面談実施…事前登校日や入学式の日、個別面談を希望する生徒および保護者と面談を行う。状況によっては関係機関と連携した個別の指導等に同意してもらい、検査結果のコピーなどを提出してもらう。4～5月頃クラス担任はクラスの生徒と個別面談を実施する。
- ④生徒自己管理ノートの提出…全校生徒に自己管理ノートを配布し記録をさせる。定期的に担任が回収し、生活状況、目標設定、反省等確認する。
- ⑤各教科担任による「連絡メモ」「支援メモ」等での実態把握…教科担任はチェック項目の記載されたメモ用紙を持ち歩き、生徒の様子を担任に報告。学年やコーディネーターにも共有される。
- ⑥支援員による観察…1年生を中心に各教科の授業に入り、観察・記録・報告を行う。
- ⑦多角的知能検査&生徒自己理解調査の実施…1年生全員に実施。客観的資料として活用。

### (2) 授業の工夫について

#### ①UD化

⇒どの生徒にとってもわかりやすい授業づくり

簡潔な説明・指示

生徒が主体となって活動できる場面の設定

#### ②評価の工夫

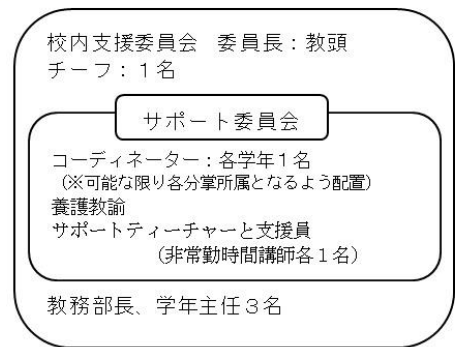
### 授業改善の一例

- 授業の流れを示し、見通しを持たせる
- 何を学ぶのか、最初に今日の授業の目標を示す
- 1枚当たりのプリントの問題数を減らし、他に何種類かプリントを用意しておく
- 教師、支援員に質問できる雰囲気
- ペア・グループ学習の効果的な活用

### (3) 支援体制

本校は、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援として、各学年に特別支援教育コーディネーターを1名ずつ配置し、毎週1回、サポート会議を行い、情報共有、支援の方法について協議し、個別の指導計画を作成している。また、特別支援教育支援員を1名配置している。さらに、年に3回、特別支援学校の教員を定期的に招いて支援方法について助言をいただく面談を行っている。

図4 校内支援体制



### (4) リソースルーム (SR) の設置

本校では、リソースルームの名称をSRとした。

SRを開設したことで、教室に居づらい生徒は、休み時間ごとSRに通い、サポートティーチャー (SRに1日5時間在中) と何気ないコミュニケーションを積み重ねた。そこで生徒の困っていること、悩んでいること、本当はこうなりたいという希望など、内に秘めていた事柄を引き出すことにも繋がった。

[資料2 SRの説明]

**SRの設置** ~全校生徒が利用できるリソースルーム~  
本校の通級指導教室『SR』とは

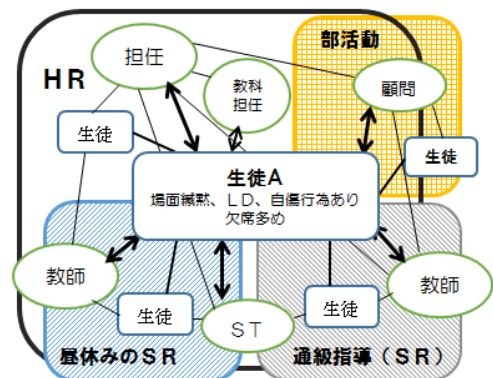
**SRとは Support & Switch & Step up Room**  
サポート & スイッチ & ステップアップ ルームを意味します。

何か困ったことがある、感情のコントロールがうまくいかないときなど、先生のサポートを受け、自分のやる気スイッチをONにし、授業など学校生活を前向きに頑張ることができるよう、生徒のオアシスとなるような部屋を目指しています。



SRを設置したことにより、通級の対象以外の生徒が次のような目的で利用しており、SRが学校全体として必要な場所となった。

生徒Aの場合、中学校からは場面緘黙との引き継ぎがあった。入学早々、集団生活に馴染めず、特に苦手科目で欠席が目立ち、進級が危ぶまれる状況となった。10分休み、昼休みごとSRで過ごし、サポートティーチャーや教員との会話が増えた。その後、教員が橋渡しをしながら、SRに来室する先輩と親しくなり、部活動に入部ことに繋がった。その後は、自立活動の授業を受講し、大きく人間関係が広がった。



[資料3 生徒Aを取り巻く学校内での人間関係の広がり]

#### 【SR利用生徒の主な利用目的】

- ・ 休み時間等、ざわつきのある教室から離れ、一人でゆっくり過ごしたい。
- ・ イライラするので感情をコントロールしたい。
- ・ 教師ではない立場のSTに話を聞いてもらいたい。
- ・ 不登校の生徒が登校を再開する際、まずは学校に来て、保健室かSRに入ってみる、そして教室にチャレンジするというようなステップを踏む空間として利用する。
- ・ SRにあるけん玉やおセロ、将棋などで、利用者同士コミュニケーションを図りたい。
- ・ 個別面談を希望したい。
- ・ 月1回来校のカウンセラーによるカウンセリングを受ける。
- ・ SRに興味関心がある。
- ・ SRの本を読みに来たり、借りに来る。

SRを利用する多くの生徒は、サポートティーチャーや教師など大人に関わってもらいたい場合が多く、大人が遊びやコミュニケーションのきっかけを作ると、生徒同士で楽しい時間を過ごせることに繋がる場合が多く見られた。

## (5) 教員の意識改革

### ①校内研修

特別支援教育に関する校内研修を平成 26 年度は7回、27 年度は4回、28 年度は校内研修を5回実施した。

特に発達障害の子どもをもつ保護者サークルの代表者を講師に招いての講演会は大変有意義な研修となり、高校教員として今後どのような工夫ができるのか、一人ひとりが深く考えるきっかけとなった。

### ②校外研修

文部科学省の研究指定もあり、全教職員が積極的に校外研修に参加した。参加後は、必ず研修報告書を提出してもらい、年度末に研修報告会を実施し、情報共有に努めた。

#### 【主な校内研修の内容】

- ・「多様な生徒に対応する指導の工夫について」大学教授による講演
- ・「高等学校から障害者枠での就職と関係機関との連携について」障害者就業・生活支援センター職員による講演
- ・「応用行動分析入門」児童発達支援事業所所長による講演
- ・本校教諭による事例検討会

## (6) 関係機関との相談体制

適宜上士幌町発達支援センター相談員に相談できるほか、毎月1回外部カウンセラーを招き、生徒や保護者との個別面談を実施。発達障がい等により学校生活に適應できていない生徒については保護者の同意のもと教員も医療機関に同席し、医師に相談・助言をもらう。

## 3 通級による指導（自立活動）の取り組み

### (1) 研究指定の概要

本校では、平成 26 年度より文部科学省委託の「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」の研究に3年間取り組んだ。本研究は、一斉授業における指導内容や指導方法等の工夫・改善を図り、「自立活動」の領域を設定し、ソーシャルスキルトレーニング等を通級による指導で行う取り組みである。

### (2) 自立活動の指導体制（担当教員）

主に2名の教諭（特別支援の免許はもっていない）と教頭1名。月に2時間程度、上士幌町発達支援センター職員のサポートもあった。H29 年度からは特別支援の免許所有者1名が配置され、主担当2名が中心となり、全教員が輪番で指導にあっている。

### (3) 指導の工夫

生徒の実態をよく観察し、生徒自ら目標設定し活動できるよう工夫した。「生活での自立」「社会での自立」を考えたプログラムを取り入れ、職場見学、インターンシップ、電話での問い合わせ等、地域と連携した実習を展開し、生徒の自主性を引き出した。

スキルトレーニングの授業は、教師が生徒にとって身近なモデルとなるよう、教師と生徒が共に活動するよう心掛けた。そして、授業展開のパターン化を図り、生徒が見通しをもって取り組めるようにした。生徒が「できた」「わかった」など達成感を得られるよう体験的な学習を取り入れた。（スモールステップ）

このような取り組みの積み重ねにより、通常の学級おける授業においても欠席が減るなど、変化がみられるようになった。

### (4) 通級による指導の効果と課題

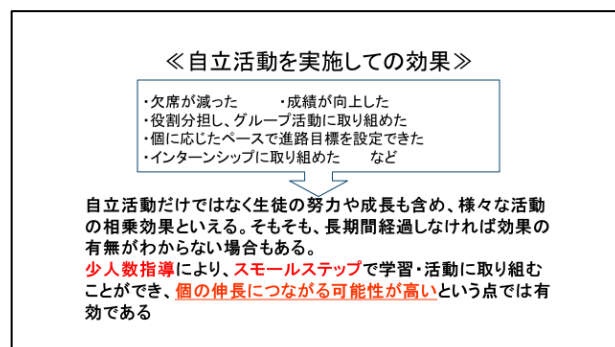
「スキルトレーニング」（自立活動）の開始前は、人とのコミュニケーションが苦手で、HRでは誰とも会話しな場面緘黙の生徒が、「スキルトレーニング」（自立活動）の学習を通して、表情が豊かにな

り、笑顔で活動することが増えた。また、受講生徒同士が互いに協力しながら取り組む場面が多くなり、徐々に周囲との関わり方に改善が見られた。教師にとっても、少人数であるため生徒の得意なことに気づきやすく、その得意なことを生かせる場面設定が行えた。

#### [資料5 自立活動を実施しての効果]

一方、課題としては、個別指導や楽しい雰囲気でのコミュニケーショントレーニングにより、生徒と担当教員との信頼関係が構築されつつあるが、一部の生徒は、甘え、反抗など、退行現象も見られはじめた（発達過程）。

また、多様な困難を抱える生徒が増え続けた場合、適切な人的配置がなければ学校での対応は難しい現実もある。



さらに、卒業後に進路先へ必要な情報を引き継ぐものの、特に就職の場合、特別支援学校で行われているような卒業後の支援（企業訪問等）に携われないことが課題である。

## 4 進路先への引き継ぎ

### (1) 支援シートによる引き継ぎ

- ①町内の生徒で、本人・保護者が進路先への引き継ぎを希望している場合は、子育てサポートファイルに支援シートを添付して引き継ぎを行った。
- ②町外生で支援シートを活用する場合は、電話で説明した後に郵送、もしくは生徒本人が持参する方法で引き継ぎを行った。

### (2) 面談による引き継ぎ

特に面談による引き継ぎを行った方がよい場合、本人・保護者が面談による引き継ぎを希望した場合は、教員が進路先へ出向いての引き継ぎ、または進路先の担当者に来校していただいた引き継ぎを行った。

## 5 おわりに

「特別支援教育」=こうあるべき、これがベストと固定概念を持つことはできない。私自身、これまで出会った生徒、保護者、同僚、管理職、関係機関の方など、多くの人から学び、その都度考え、対応にあたった。常に反省点があり、改善点・工夫点が浮かぶ。

人は誰もが支え、支えられ生きている。特別支援教育は、一部の生徒のためのものという発想ではなく、誰もが必要な時に活用できるよう備えておくべきものである。

現在、私は特別支援教育コーディネーターとして、特別支援教育に関わる教員研修の機会を増やし、教師一人ひとりが授業のユニバーサルデザイン化へと働きかけている。うまくいかないことも多いが、今後も地域との繋がりを重視し、高校卒業後も地域で繋がれるようネットワークを構築し、途切れない支援体制の構築を目指していきたい。